化妆·装扮

金盾出版社

花袋・秋声

＊吉田精一著作集

8

桜楓社

吉田精一著作集　第八巻

花袋・秋声

昭和五十五年六月十二日　第一刷発行

定価　二四〇〇円

著者　吉田精一

発行者　及川篤二

発行所　（株）桜楓社

東京都千代田区猿楽町二―八―一三
電話東京03二九五―八七七一（代表）
振替東京六―一八〇二〇郵便番号一〇一

© 吉田精一　一九八〇年
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替え致します。

0392-800651-0723

吉田精一著作集　第八巻　目次

序章　花袋と秋声

I　田山花袋

一　田山花袋……7
1　感傷的自己告白の文学　7
2　花袋と外国文学　30
3　花袋の転換　42
4　「蒲団」の意義　59
5　「生」と平面描写論　75
——花袋とゴンクール——
6　三部作と「田舎教師」　96
7　短篇と「髪」　107
8　宗教的レアリスムへの脱出　117
9　花袋文学の四系統と四大作　132
——「時は過ぎ行く」「一兵卒の銃殺」「残雪」「再び草の野に」——
10　歴史小説と落莫たる晩年　153
二　田山花袋——人と文学……172

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三　花袋文学の本質……201
四　近代作家像への照明……217
——田山花袋——
1　技巧を越えた作家資質　217
2　純で一図で愚直な歩み　221

Ⅱ　徳田秋声

一　徳田秋声……229
1　自由主義者秋声　229
2　秋声の展開　249
3　「秋声集」より「新世帯」へ　263
4　「足迹」と「黴」　276
5　秋声の爛熟と固定　287
——「爛」から「あらくれ」へ——
6　世相小説から私小説へ　300
——大正中後期の長、短篇——

7　晩年の秋声
――「仮装人物」と「縮図」――　320
二　徳田秋声作品解題……344
*
第八巻　花袋・秋声あとがき　369
解説　和田謹吾　371

序章　花袋と秋声

日本の近代文学が真の近代性を獲得したのは明治末期の自然主義文学運動によってであるが、花袋と秋声の二人は翌五年生まれの島崎藤村とともに、その中心的な存在であった。藤村が、漱石・鷗外とともに文豪として多くの愛読者をあつめ、完全な全集が何回も出ているのにくらべて、二人ははなはだ一般的人気にとぼしい。花袋も秋声もきわめて不完全な全集が出ているきりであり、彼等二人の先駆者だった国木田独歩は先年やや完全に近い全集が出たが、おどろくほど売れなかったらしい。

しかし人気のないということと、作家としての価値がないというのとはちがう。人気はなくとも彼らは近代文学史上の一流作家には相違ない。

中では国語の教科書などにとられているから、独歩が比較的広く親しまれているだろう。彼は早く仕事を仕上げて、三十七歳で世を去った短編作家である。長編を一編も書いていない点では芥川龍之介に似ているが、芥川やフランス・ロマンチスムの作家メリメをマイナーポエット（小詩人）という意味でのマイナーポエットである。巨匠とか大作家とかいう風格とはちがって、純粋な作家なのだ。独歩は小説家というよりは散文の詩人であって、ものを直観的に見る力と、あざやかに語る才能には天才的なきらめきがある。

初期の作品では東京近郊をえがいた「武蔵野」や「忘れえぬ人々」が有名だが、明治三十年ごろの「武蔵野」のおもかげは、今は独歩の文章の中にのこっているのみで、今昔の感にたえない。「忘れえぬ人々」は、

自然もしくは人生のシンボルとしての「忘れえぬ人々」を語ったもので、彼の作中人物はすべてこの種の「忘れえぬ人々」であった。彼は「真の歴史は山林海浜の小民に問え」との信念をまもって、多くの凡人や、「非凡なる凡人」を描きあげたのである。

独歩にくらべると花袋は鈍重な長編作家で、もっとも大きな声で自然主義文学を宣伝し、その中心にすわって、一時はローマ法王のような権威をふるっていた。正宗白鳥は「田山氏は明治後半から大正へわたっての文壇に最大の感化を及ぼした人である、だれよりも感化力が大であった」と評したが、彼は主義主張で人々を動かしただけではなく、作品の上でも大きな影響をあたえた。

誠実に自分の内面を直視し、たとえそれが醜悪でも、真実を見たまま、感じたままに描いて行こうと主張もすれば、先頭に立って実践もしたのが花袋であった。彼はその立場から、自己の周囲や、肉親の世間からかくしたい秘密も、また自分自身の愛欲生活も、包まずかくさず、ひろげて見せたのである。それがのちの日本特有の私小説を産んだことは、文学史上の常識となっている。

そういう行き方は西欧の科学的な自然主義とはちがう。花袋はその点で西欧の自然主義を誤解したと中村光夫君などは批評しているが、そんなことはない。花袋はちゃんと外国の文学が立脚している社会の現実と、日本のそれのちがいを認識した上で、国によって自然主義のちがうのは当然だから、日本の現実に即したジャパニーズ・ナチュラリズムをうち立てるべきだと考えたのである。

作家としては、無器用な上に性急で、構成力もとぼしく、技巧的には熟していない。しかし「生」「田舎教師」「一兵卒の銃殺」「時は過ぎ行く」などという長編には、繊細な都会人作家にない重厚な力量感と、強い迫力がある。三人の中では彼がとりわけ不人気だが、私は「文学の鬼」といわれた宇野浩二から、藤村、

秋声、花袋の三人はどれがどれともいえない近代最大の作家だという説を、直接きいたことがある。

独歩は明治四十一年（一九〇八）に世を去り、花袋は昭和五年（一九三〇）に死んだが、秋声は昭和十八年（一九四三）まで生きながらえ、晩年も創作力がおとろえず、すぐれた多くの短編とともに「仮装人物」や「縮図」のような長編の力作を発表している。

秋声は地味な、くろうと好みの作家である。彼は生まれたる自然主義の作家と称されたことがあるが、日常生活に密着し、ちまちました世相をとらえて、社会の片すみに生きる庶民の微細面をつくった。大がかりな構想とか、強い問題意識とかは、薬にしたくもないかわりに、さしたる教育もなければ、これという希望もなく、どうにか日を送っている男女の、雑草のような生活を描かせると、だれも及ばぬ腕をもっていた。とりわけ下積みのしいたげられた女性の心理や生理の描写にかけては、「筆、神（しん）に入る」といってもあながち誇張ではない。簡潔な筆致で、何気なくうつしながら、陰影の濃い人生味、現実味を暗示的に感じさせるのである。

彼はまた自己を主人公とした私小説や心境小説の典型的作家であった。常に動く人生の中に身をおいて、あらゆる観念にとらわれず、うぬぼれも自虐もなく、凡庸な市井人の一人としての自分を客観視し得ている。そしてそれなりにまとまりと密度のある人生模様を浮き彫りになし得た。花袋は大陸的なところがあるが、秋声のような作風は、外国にも例があるまい。かつて川端康成は、「小説の神様」は志賀直哉や横光利一でなく、秋声であり、「名人」もまた泉鏡花などでなく秋声だと言ったことがある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I

田山花袋

一　田山花袋

1　感傷的自己告白の文学

ルソオはその「懺悔録」の冒頭に云う。

私のやらうとしてゐるのは、嘗て先例のないことで、これからも恐らく真似手があるまい。それは人間ひとり素裸にして世間の人達の目の前に晒者にしようといふのだ。さうしてその人間が私自身なのである。（略）いつの日、最後の審判の喇叭が鳴り渡るとも、私はこの一冊を携へて、審判者なる神の前に出で、高らかに声を挙げて云はうと思ふ。――斯く予は為しき、斯く予はありき。……虚妄と知りしものを、真実となしたることは断じてあらず、時には低劣下賤なる人間として、時には善良なる、寛大なる人間として、ありのまゝに自らを曝露せり。……

ルソオはわが国の文学にも強い影響を及ぼした。ことに藤村や花袋にそれが強い。自我の告白と懺悔、そこにひそむ倫理的要求は、他の誰よりもこの二人のものであった。藤村は「藤村詩集」の一巻に、その主観の跳梁と、感傷を流し棄てて散文に立ち向い、やや客観的な姿勢をとったが、花袋は空想と感傷のうちに溺

れつつ、自己と個性に執着しつづけた。彼は自我を客観的に形象化し得ぬロマンチックな詩人的小説家として出発した。しかし誰はばからぬその感傷の露出は、紅葉等硯友社になく、二葉亭になく、風葉、天外等にないものだった。時代の波に動かされながら、外国文学通と呼ばれながら、常に彼は自我の観照と詠歎から離れ得なかった。彼の自我は貧しく、常に肥え太らなかった。想像力は貧弱で、情熱も強くない。文学的才能として凡ての点でルソオに劣りながら、自然に対する親しみと愛のみは近いものがあった。むしろ彼はロマンチックな風景詩人だった。この花袋の本然の傾向は、硯友社文学のアンチテーゼであった。不自然と作為を脱して、素朴と自然なものを求める彼本来の志向は、必然的に有限な世相や社会を越えて、永遠なるもの、無限なるものにあこがれた。それらは冷酷な現実には見出されず、つねに期待のうちにしか存在しないところから、結果として、憂欝と感傷の中にかきくれざるを得ない。花袋初期の作風の基調は、一言でいえばここに存するのである。

彼は「考えるより先づ感じ」る作家であり、感じなければ考えない人だった。このことが彼を、あくまで自己に正直な、自己の問題しか興味をもち得ない、主観的詩人的作家にした。それは彼のスケールを小さくし、又彼を千篇一律な主観詩人とした。たまたま外国作家や作品からフィクションをかりると、それはとってつけたような主題とはなればなれのものとなり、その不器用さを現わしたのである。にも係わらず、この自我に執する個人主義的態度は、その中につくりものの客観的世相描写にない、誠実さと主観的な真実を含んでいたのである。それはロマンチック・レアリスムともいうべきものだった。自我をつきはなしそれを分析し得ない彼に批判は弱く、告白があるばかりだった。

田山花袋は明治四年十二月十三日上州館林の産。父は下級士族で、西南の役に巡査として従軍して仆れた。

貧家に生い立ち、正規な教育をうけなかった。幼少の折から、松浦辰男に桂園派の和歌を学び、又漢詩をつくった。このことは彼の作品に後年までも深い痕跡をとどめた。彼はのちに、和歌から得た影響として、「つとめて美しいインプレッシブな所を歌はうとしたこと」が善悪両様に作用したといい、又「感情を偽はらない」という桂園派のモットオをたたきこまれたことをあげている。松浦の歌については、「日常の生活とささやかな事象とを歌つたものが多い。そして描写的で理屈が少い。……私の作にささやかな事象の意味を書いて成功したものがあつたら、それはこの人の歌の感化である」(「小説作法」三四―五一頁)といっている。数え年十五歳(明治一八年)の頃から漢文漢詩を「穎才新誌」に投じた。又別に十五歳から十八歳までの自作の漢文漢詩集「買山楼初集」をも編んでいる。彼は漢学をやるか、英語をやるか、法律、政治を修めるかなやんだというが、その文学愛好趣味は、紅葉、露伴に傾倒し、遂に二十四年五月、紅葉に手紙を出して門下生たらんことを求めた。紅葉は彼の原稿の一頁ほどを赤く直し、「君の文はまだ調子が出来てゐない。散文でも調子といふものがなくてはならぬ。何うもまだ十分でない」(「小説作法」二九頁)といったという(この小説は「北越雪譜」に材を得た「雪仏」で、花袋には習作の第二作だった。第一作は言文一致の「月影」大正九年一一月「文章世界」)。その結果硯友社系統の新進のために設けられた舞台というべき「千紫万紅」に小説をのせることができた。「千紫万紅」は二十四年(一八九一年)六月の創刊で、実務は江見水蔭がとって居り、当然花袋は水蔭と親しくなった。この雑誌は二号に小栗風葉(艶如子)を紹介したが、五号以後花袋の作品が多い。花袋の号は種彦の随筆「用捨箱」十四に出、香嚢、即ち匂い袋のことをいう。かくて彼は硯友社系統の作家として出、世も亦その一員と見なした。後年彼が博文館に入り、水蔭の下に「太平洋」を編集したのも、「中学世界」の記者となったのも、この環境に居たからだった。即ち彼は風葉と殆ど出発をひとしくし、秋

声より牛門の先輩だった。ただ風葉は彼より文才あり、描写力にすぐれていたために早く名を成した。彼は風葉ほど世間を知らず、ことに女性を知らぬ夢想的讃美者であったために、硯友社風の情痴の世界にはタッチし得なかったのである。

さて花袋の処女作「瓜畑」は古桐軒主人の名でこの雑誌五号（二四年一〇月）に出ている。これはきわめて簡単なスケッチ的小品で、三人の十一、二歳の子供達が、瓜畑に瓜を盗みに行き、番人の丸太棒をくらうが、どうやら目的を達したものの、手に入れたのは熟しもせぬまずいものだったという、おかしみを狙った原稿紙六枚半ばかりのもの。ただ文章が以後の作品に比してかわって居り、西鶴の匂いがする——というより、明治の元禄調に近い。

> されば小言好の戸長殿も、此頑童の口先に懸りては閉口の外なく、教師面の村夫子も、剖葦爺と混名附けられてはいつも此頑童を除物に仕給へり。

とあるような書き方、或は、

> 里川の板橋渡る農夫は、夕飯の菜なきをも苦にせず、夕納涼にと橋の袂に出でし村教師は残螢に風の行衛を知り、お万が紅附た西の空も、いつか夕立の雲名残なく懸り、かなかな蟬の声も裏の杜に聴えずなりて、樋口の杭にあたる黒川の水声ばかりさぶさぶと高し。……

とあるあたりなど、紅葉の文調を模して遠く及ばないもので、語彙とぼしく、想像の奇峭なく、機智に欠けた文体のもち主であることを示している。これにくらべると風葉の艶如子の「水の流」（二、三号）などは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c